

まよきの手

小さな手、優しい手、しわしわな手…。

まちにはたくさんのお手がある。

赤ちゃんも大人も、日々の暮らしの中で

さまざまなカタチで手を使う。

お母さんの手に甘えて包まれる赤ちゃんの手、

仲良しになる握手。

顔を洗ったり、鉛筆を握って文字を書いたり、

点字を読んだりするの一手。

拳を振り上げることもできるけれど

頭をなでることもできる手。

あなたは、その手で

何をしたいですか？



1 福祉センター2階で行われたフリーマーケット 2 地元産の野菜を販売する団体も 3 会場入口では、「無料お買い物券」が当たる抽選会を実施。女性や子どもが喜んで買物をし、売り上げに貢献した 4 自分たちのイベント終了後、自主的に募金活動をした児童館の子どもたち



「身を犠牲にして幾百人の命を救うことができたなら私の本望である」

本町は、多くの人々の命と村の農業を大飢饉から守るため、自分の命を犠牲にして麦種を残した義農作兵衛の「義農精神」が今に息づくまち。奉仕の心と人情豊かな住民性を背景に、ボランティア活動や環境保全活動など、幅広い分野で活発な住民活動が行われています。町内で活躍しているボランティアグループは、現在32団体（社会福祉協議会登録分）。

北黒田の怒和和恵さんは、「デイサービスセンター「みどり」で入浴後の髪の手入れ、話し相手をするボランティア「そよ風」の代表。和恵さんは「ありがとう。気持ちよかったよ」と喜んでくれるのがうれしくて」とにっこり。高齢者サロンの代表でもある怒和さんは「お年寄りに会うのが楽しみなんです。人との出会いが幸せ」とも。

昌農内の丸田力さんは、町内の各施設を訪問し、車いす介助や話し相手をするボランティア「であい」の代表を務めます。「時間があつたら何かしたい。ボランティアは私の生きがい。」

怒和和恵さん

ボランティア「そよ風」代表
北黒田高齢者サロン代表 北黒田



Nuwa Kazue

ボランティアもサロンも気負いがなくて、毎回楽しみです。家で一人にいるよりは、誰かといたい。何でも出合いが楽しいです。ボランティアは、まちも自分も元気にしてくれると思います。

自分が楽しいと同時に相手が喜んでくれる。それが何よりうれしい」と瞳を輝かせます。

奉仕の心で活躍している大勢の人。その活動は多様ですが、丸田さんや怒和さんのように、人に対して奉仕の手を差し伸べることに喜びを感じている人がたくさんいます。

東日本大震災後、被災地ではボランティア活動が途切れることなく続けられています。町内のボランティア団体で組織する「松前ボランティア連絡協議会（丸田力会長）」も、募金活動などさまざまな支援を続けてきました。

喜びの笑顔広がる「奉仕」の手

奉仕の心が息づく松前町。思いやりの心、人情の豊かさは、まちの優れた資源と言える。町内では活発なボランティア活動が行われ、多くの手がつながれている。

丸田 力さん



Maruta Tsutomu

松前町ボランティア連絡協議会会長
ボランティア「であい」代表 昌農内

フリマの祭典で「お買い物券」を企画しました。その元金はどうしようかと悩んでいたら、17グループが寄付してくれました。みんな温かい。松前のボランティアの輪は、どんどん広がっていると思います。

INTERVIEW

重松賀代子さん



Shigematsu Kyoko

松前町ボランティア連絡協議会副会長
ボランティア「しおさい」代表 出作

私にとってボランティアは生活の一部。他市のボランティアに「やりがいがない」と言う人がいて驚きました。松前の人にはそうじゃなく「奉仕」でしている。その心が届くから大勢の人に喜ばれるんだと思います。

3月11日には、松前町総合福祉センターで「フリマの祭典」を開催し、収益金の一部を義援金として寄付しました。フリマの祭典にはボランティア団体と個人の20ブースが出店。日用品や手作り品などを販売しました。そのうち、伊予地区精神保健ボランティア「しおさい」は、人気の手作りクッキーを販売。代表の重松賀代子さんは「いつも買ってくれる人はもちろん、『被災地支援になるなら買わない』と言って、大勢の人が買ってくれました」と微笑みます。

フリマ以外にも、猫袋で炊

いたご飯の試食（災害救援ボランティア湧水）、作品展示販売（障害者自立ひまわりの会）など、さまざまなイベントが行われました。来場者特典として買物した人に進呈した、フリマの祭典だけで使える「無料お買い物券」が当たる抽選券は、売り上げアップに貢献しました。

イベントは大成功。丸田さんは「みんな一声掛けると『協力させて』と返してくれました。私一人の力じゃどうにもならない。出店してくれた人、買いに来てくれた人、全ての人に感謝です」と話していました。



松前町ボランティア連絡協議会

- 地域ボランティア活動の活性化と拡大を目指す
- ボランティア団体間の連絡調整、情報交換を行っているほか、ボランティア活動啓発、育成、広報活動、講演会・研修会・交流会などを開催。
- ☎ 松前町連絡協議会（松前町社会福祉協議会内） ☎ 985-3200



子どもたちと家族、スタッフが、おもちゃで遊んだり、語り合ったりして自由に時間を過ごす

心がほっとできる 「共感」の手

3月、町内初の子育てサロンが誕生。「にっこ子育てサロン筒井(笹山伊智代代表)」、愛称「にっこ」は、子育て中の人を、地域の子育て経験者が温かく迎える場。子ども、親、スタッフみんなが笑顔にならずにはいられない場所だ。

「にっこ」は、毎月第1・3月曜日、筒井公民館で開かれています。対象は就園前の子どもと家族。主任児童委員3人や子育て経験者3人のスタッフと一緒には、おもちゃで遊んだり、語り合ったりします。

サロンを企画したのは主任児童委員の笹山伊智代さん。地域でさまざまな家庭を見てきたからこそ、子育てサロンを立ち上げることはかねてからの夢でした。「児童虐待をしてしまっ親、産後うつで命を絶つてしまった親。悲しい事件にいくつも直面してきました。もうそんな思いはしたくないから」と言葉を詰まらせます。

そんな笹山さんの想いに共感するスタッフと共にスタートした「にっこ」。3月5日、大広間にはたたくさんの親子の姿がありました。

県外出身の竹本絢子さんは「自分の母親世代の人が『おば

あちゃん』と思っていからね」って声を掛けてくれました。来てよかった」とにっこり。

2回目の3月19日、感想には「前回来て今回を楽しみにしていました」「心にゆとりが持てました。ここに来るとまた頑張ろうという気持ちになります」などの声が寄せられました。

笹山さんは「子どもとずっと一緒にいると、ママがしんどくて子どもの成長や笑顔を見逃してしまいます。私たちと一緒に過ごすことで、子どもの笑顔の素晴らしさに気付いてほしい。これが私たちスタッフの願いです。皆さんのお子さんの笑顔が私たちに『おすそわけ』に来てください」と呼び掛けます。

痛みを感じている人は、手を握ったり背中をさすったりするだけで心が穏やかになります。共感されていると感じるからです。そんな手が、にっこに集うみんなを笑顔にしています。

城戸麗華さん・伶心ちゃん 筒井

車の免許がないので近所に「にっこ」ができて本当にうれしいです。皆さんが子育てのアドバイスをくれて、子どもにも温かく接してくれてありがたいです。



竹本絢子さん・ひよりちゃん 西古泉

ママ友と一緒に参加しました。県外から松前に引っ越してきたので、自分の母親世代の人が優しく接してくださって、すごく安心することができました。



にっこ子育てサロン筒井

- 筒井公民館(大広間)
- ◎ 第1・3月曜日/9時~11時30分(祝日の場合は翌週月曜日)
- ① 就園前の子どもと家族
- ② 笹山伊智代 ☎ 985-3309
- ④ 無料



松前町にはたたくさんの奉仕の手があります。その一方で、それが届けられないもどかしさがあります。

町内に住む65歳以上の高齢者は7903人(2月現在)。一人暮らしの人も少なくありません。そんな高齢者に支援の手を差し伸べている「独居高齢者見守り推進員」。現在、37人の推進員が625人の高齢者を定期的に訪問しています。

北黒田の沖峰子さんは、「私たち見守りが孤独死を発見することもあります。十数年の付き合いがある人の場合も、とてもつらい」と胸の内を話します。一人で何人も担当している推進員。毎日活動できるわけではありません。

筒井の井上佳代子さんは、20人を担当。「訪問を楽しみにしてくれている人もいれば、急に来られて困るという人もいます。今の時代、多少のおせっかいは必要だと思いい活動しています」と話します。井上さんの担当地区では、隣近所が独居高齢者というところもあります。「元氣な人を見てあげてね」と声を掛けると、「そうじゃね」と言ってお互い気

に掛けて暮らしています。せめて両隣は温かく見守り合いたいですね。みんながそうしていけば、町全体がつながっていきまますから」

推進員同様、地域を支援するために活動している民生児童委員。地域社会の実情把握が求められています。しかし、少子高齢化、核家族化に加え、マンションの増加など住宅事情の変化、個人情報保護など社会環境の変化は、人間関係を希薄にしました。地域の実情把握が難しい状況をつくり出しています。

民生児童委員の横田啓元さんは「見守りさんの活躍があって、独居高齢者への援助はできていると思います。けれど現在社会問題化している児童・高齢者虐待、いじめなどへの対応は、特に把握が難しく、十分なアプローチができているとは言えません」と話します。

そこで民生委員の皆さんは、地域の行事に参加したり、登下校の子どもたちと声掛けをしたりと、普段の生活でアテンナを張って、穴埋めをしています。

「それでも私たちの活動に

井上佳代子さん

独居高齢者見守り推進員 筒井



Inoue Kayoko

人は一気に90歳になるわけはありません。普段の付き合いが大切。高齢になって子どもの元へ引越す人もいます。そのときは『高齢の親が同居するのでよろしく』って子どもが近所に声を掛けてくださいね。

横田啓元さん

民生児童委員 筒井



Yokota Hiroyuki

自分で解決しようと努力されるのも素晴らしいことですが、一人で抱え込まないでください。人とのつながり「パイプ」を作ってください。私たちもパイプになります。遠慮なく頼ってくださいね。

INTERVIEW

みんなに届けたい 「支援」の手

全国で流れる孤独死のニュース。人とのつながりがあれば救うことができたのではないかと考えずにいられない。奉仕の手がたたくさんある松前町でも、それが届かないことも一。民生委員や高齢者見守り推進員に、まちの現実、現状を聞く。

ぬくもりつなげる「真心」の手

黄緑色した「北伊予っ子見守り隊」の帽子。町内のいろいろなところで見掛けませんか？何も音は発しないけど、この帽子は「いつも見守ってるよ」と語り掛けてきます。



松山生協の交差点に立ち、子どもたちを見守り続けている水口憲三さんと道子さん夫婦

北伊予校区の学校、地域、PTAが連携し、子どもの見守り活動を行っている「北伊予っ子見守り隊」。主な活動は、登下校時のパトロール、通学路での街頭指導、声掛けです。

スタート時は地域の役員、PTAなどに限った活動でした。平成18年に黄緑色の帽子を導入し、「いつでもどこでも子どもを見守ってほしい」というPTAの呼び掛けに賛同した地域の人、老人会のメンバーなども帽子をかぶるようになりました。役員が終わっても活動を続ける人が多いため、その数は

年々増加。帽子に記された通し番号の最後は461。大勢の人が連携しています。

水口憲三さんは、毎朝出作の交差点に立ち、子どもたちを見守っています。見守り歴15年。7年前からは妻の道子さんも一緒です。憲三さんは「子どもたちのあいさつは気持ちいい。ライフワークです」とのこと。道子さんは「自分の孫も登下校中どこかで誰かが見守ってくれていただろうなと思うと、義務ではないけど、なんとなく体が行こうとしてしまいます」と微笑みます。

西岡久雄さんと谷本巨さんは神崎の交差点に立ちます。子どもたちが挨拶をする「今日はしんどそうやな、どしたんぞ」「野球頑張ってるか」などと声を掛けます。そんなふうに見守られ、元気に登校してきた子どもたち。6年生は卒業前に、二人に手紙を渡しました。「今日はどんな声を掛けてくれるかなと毎朝楽しみでした」「遅れたとき、ずっと立っててくれたことがうれしかったです」「これからも見守ってください」

手紙を読んだ二人は「辞められんわな」とにっこり。4人のように、寒い日も暑い日も雨の日も、毎朝欠かさず子どもたちを見守る隊員は他にもたくさんいます。そこまでの活動ができなくても、自分ができる範囲で帽子をかぶる人もいます。数ある帽子の中から

見守り帽を選んで農作業をする人、登下校の時間に合わせて帽子をかぶりウォーキングをする人など、あらゆる場面で大勢の人が帽子を手にします。そうしたたくさんのお手は、とても大きな力になります。

手は表情豊か。手はその人を表します。帽子をかぶる隊員の「手」、この何気ない「手」が松前町の人間性、ぬくもりの表れです。手が機械と異なるところは、それが直接心とつながっていること。いつも奥に心が控えていて、人に喜びを与えたり、人を支えたりします。

まちで見守り帽をかぶった人を見掛けると心が温かくなります。だからといって、道路に見守り帽を並べれば安心なのではありません。帽子をかぶる人の手（心）があるから、ぬくもりを感じるのです。安心できるのです。

奉仕の手、支援の手、共感の手、真心の手。松前にたくさんある「手」に気付いてください。その手をつないで、広げていきましよう。

いつでも、どこでも、誰かのぬくもりが感じられるまちなるよう。



一人一人安全に誘導する谷口巨さん



4_子どもたちの登校時間に合わせてウォーキングしている仲良しメンバー。左から松本忠さん、鈴木忠治さん、村上興二さん、岡部優さん



5

1_西岡久雄さんと谷本巨さんは黒田病院の交差点に立つ。隣が集団登校の集合場所でもあるため、子どもとたくさん会話を交わす 2_池内力さんは農作業のときに見守り帽をかぶる 3_山本剛さんは登校時の街頭指導とウォーキングのときにかぶる



3

2



「家までもうちょっと。頑張って帰ろうね」中川原の白石伊津美さんは、集団下校の日、できる限り小学校まで行って子どもたちと一緒に下校する。3月14日は、一番家の遠い本多雪乃ちゃんに寄り添って歩いた。



Minakuchi Kenzo



Minakuchi Michiko



Ikuchi Chikara



Nishioka Yasuo



Tanimoto Wataru



Shiraishi Kosuke